

Bucholz RW・他 著
広畑和志（神戸大学教授）監訳

整形外科 DECISION MAKING

石田 肇（日本医科大学教授）

日進月歩の医学に於いて私共臨床医の消化しなければ成らない情報量は莫大のものであり、これらを十分に駆使し正確な診断、的確な治療を実施することはたゆまざる努力が我々に要求されている。医学書院では夙に Clinical Decision Making のシリーズが刊行されていてこの方面で貢献されているが、今回広畑教授ほか神戸大学整形外科御出身の立石、司馬、黒坂諸先生により RW Bucholz 等の ORTHOPAEDIC DECISION MAKING の監訳がなされ世に問われるに至ったことは、誠に御同慶にたえない。

本書の成り立ちは四人の著者による分担執筆であるが、外傷性整形外科疾患、成人の整形外科疾患、小児の整形外科疾患、それに手の外科の四つの大項目にわかれ、重要な整形外科疾患が洩れなく記載されている。本書の特徴としては見開き2頁に全ての疾患がまとめられ、とくに左頁に簡潔な纏め問題提起とともに右頁に日常整形外科の診療で大切な意思決定の場面で遭遇する問題を段階的手法により分かり易く図示されていることである。本書を絶えず座右において機会あるごとにひもとけば、整形外科に対する思考原理が自ら体得されるものと信ずるものである。

本書は若い研修医や実地医家を対象として作られたものと思われる

が、実際に教育を担当している指導医にも有効な座右の書として薦められるものである。

さて各項目それぞれに特徴がみられるが、外傷性疾患では最初に骨折治療の原則が記載され『木を見て森を見ず』の誤りを犯さないように実に巧みにまとめられている。例えば生命にかかわる損傷の救命、救急処置を第一義とし、骨折に際しの凡その出血量も具体的に記され大腿骨皮下骨折では 400 ml、骨盤粉碎骨折では 1,400~1,600 ml と記されている。またとくに開放骨折では感染の予防としての抗生物質、抗テタヌス血清、デブリッドマンの重要性をとき、最後に保存的に治療すべきか、観血的に治療すべきかおよその決定を項目をあげて明示している。これが Algorithm に従って重要なものより A、B、C…の順に思考すればよいように構成されている。また行き届いていることは、各項目毎にかならず、3、4の必要な文献が記載されていることで改訂版では若しそういうことが可能であるならば、本邦の文献も追加して頂ければ本書の利用価値は一層あがるものと思うが如何なものだろうか。

成人の疾患としてまず腰痛の問題が取り上げているが、腰痛の評価など示唆に富む内容で腰痛には情緒の問題や二次性増悪因子が加わったりして複雑となるが慢性化

したものでは MMPI やその他の心理学的評価の必要性をとき、よく見落とすことであるが、まれに強直性脊椎炎による頑固な腰痛のあることで消化管疾患を伴う大関節障害では HLA-B-27 陽性で血沈の亢進をしめす本症を考慮すべきこと等指摘している。

成人病としての糖尿病は本邦でも重視されているが、本書では糖尿病足と言う項目があり、整形外科医もこの疾患に精通していなければ成らないことを警告している。

小児疾患では跛行について 0~5 歳、5~10 歳、10~15 歳など年齢別に記載され本書の実戦的な特徴を遺憾なく発揮している。従来小児科では取り上げられていた筋疾患 (floppy child) やその他の筋疾患の鑑別などは類書に見ない項目として特にあげられよう。

手の外科は指尖損傷や屈筋腱損傷、伸筋腱損傷、熱傷、上腕神経叢麻痺、リウマチの手等重要な項目は洩れなく記載され、その実用性が極めて大きいことも本書の特徴として挙げられよう。

従って本書は従来の成書とはその趣を異にし、膨大な情報量を極めて簡潔に要点をついて記載されており、いかなる疾患を想定しに治療を進めてゆくかについて明確な決定を下す示唆に富む名著であり、読了した現在、本書の価値は読者が決定すべきものであることを知りながらも座右において常に愛読すべき良書として広く諸先生にお薦めする次第である。

(B 5, 頁 310, 図 205, 1987, ¥6,000, 〒 300, 医学書院 刊)